

# アトリエ 琉游舎 だより 58号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)  
琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2019年7月31日発行

## 時鳥・蜩・蟋蟀

(ほととぎす)

(ひぐらし)

(こおろぎ)

- ・この季節は早朝から深夜まで耳を澄ますと一日中鳥や虫たちの鳴き声が聞こえてきます。特に早朝は時鳥と蜩の声で目が覚まされます。夜はテレビを消したとたん蟋蟀の鳴き声に耳を奪われます。
- ・人工的な音を取り去ると、自然は心地よい静けさと、生きものたちのお喋りの声に溢れた不思議な空間です。うるさいのか静かなのか。自然はなんと静寂と喧噪に溢れていることでしょうか。夜中にはときおり獣らしき鳴き声も聞こえてきます。
- ・ほととぎすは時を知らせる鳥だから「時鳥」、ひぐらしは周辺に鳴き声を響き渡らせる虫だから「蜩」あるいは日暮れを知らせるから「日暮」。と言うところまでは何とか想像がつきますが、杜鵑,子規,不如帰,郭公,杜鵑草,杜宇,蜀魂,田鵑,霍公鳥,杳手鳥,霍公。これらの漢字も全部ホトトギスと読ませるとなると、もうお手上げで語源の見当がつかいません。
- ・梅雨寒が続きましたが、夏は暑いのが何よりです。ホトトギスの声が目覚ましとなり、蜩の声にそろそろ晩酌の準備を始め、蟋蟀の声が自然の眠気を誘う。琉游舎のいつもと変わらぬ3回目の夏です。

### お盆施餓鬼法要8月18日(日)10時半から

8・9月のスケジュール			木	金	土	日
月	火	水	1	2	3	4
5	6	7	8 映画会 13:30	9	10 詩話会 13時半から	11
12	13 読書会 13:30	14	15 映画会お休み	16	17	18 お盆施餓鬼法要 10時半
19	20	21	22 映画会 13:30	23	24	25 居酒屋の会 16時から
26	27 読書会 13:30	28	29 映画会 13:30	30	31	9月1日 写経会 13時半
2	3	4	5 映画会 13:30	6	7 詩話会 13時半から	8

**読書会**  
8月13日(火)  
8月27日(火)  
13時半から

**写経会**  
8月4日(日)  
9月1日(日)  
13時半から

**詩話会**  
8月10日(土)  
9月7日(土)  
13時半から

**居酒屋の会**  
8月25日(日)  
16時から

**映画会**  
毎週木曜日  
13時半から

「物事の生起（生）と失せる（死）ことわりを見ないで百年生きるより、この生死のことわりを見て一日を生きることのほうがすぐれている」注1原始仏典にあるお釈迦様のこの言葉が象徴するように、仏教は「生と死」は縁りて起こる不可分なもの（生死不二）と観て、その生滅からの解脱を思惟し実践する宗教なのです。「未知生、焉知死（いまだ生を知らず、いづくんぞ死を知らん）」注2弟子に死の意味について問われたとき孔子はこのように答えたと言語は伝えています。未だ人間としての生き方が解らないのに、どうして死のことが解るだろうか。そんな暇があるなら与えられた生を十分に生きることに傾注しなさいということなのでしょう。現実主義的な中国人の実践倫理を簡潔に表している言葉です。

「死は魂の消滅ではなく、人間のうちにある神的な靈魂の肉体の牢獄からの解放である」注3とプラトンはソクラテスに魂の不死を語らせています。肉体と魂を峻別し、ロゴスによって論理構築する西洋の理性哲学の源はここにあると言ってもよいでしょう。

紀元前のほぼ同じような時代に離れた場所で3人の偉大な思想家はそれぞれ「生と死」について異なる考えを語っています。「生」と「死」を一体と考えるか、別のもつと考えるか、立場の違いはあれ「生と死」の問題は生きているかぎり避けて通れない問題であり、思考の出発点にあるものです。

私は「狂言綺語」では「生」のことばかりで「死」について語ってはきませんでした。それはこの現代社会では「死」は「生」から隠されていて、生活の場では「死」を実感する場所がほとんどないからです。ありのままに観ることをあらかじめ拒絶された「死」ならば、そこに踏み込むことはとても勇気のいることです。日常生活の中で肉体的な死の兆候が現れると、ほとんどは一旦病院という非日常空間に隔離されてしまうでしょう。そこで行われることはいかに「肉体的な生を持続させるか」が全ての目的であり、いかに「良く生を全うするか」という思考は許されなくなるのです。それは「死」は苦痛で悲しく不幸なことだと考えられているからなのです。が、それでは逆に「生」は楽しく喜びに溢れ幸せなことといえるのでしょうか。

お釈迦様は人としてまぬがられない四つの苦しみ。すなわち生まれること、年をとること、病気をすること、死ぬことを「四苦」と呼び人生は「一切皆苦」だと語られました。「死」も苦ならば「生」も苦なのです。生まれてから死ぬまでの全てが苦しみであるという認識がお釈迦様の観たありのままの人の姿です。そして苦からの脱出を願いそれを実現するための実践方法が仏教の教えです。その行いのたどりついたところが「安らぎの処」。悟りや解脱と言われる境地です。その境地は私がこの場で繰り返しお話ししているように、どこかこの世界と違うところにあるものではなく、今生きている日々の中にあるものです。日々の「生」が苦痛であるならば、「死」もまた苦痛です。反対に「生」が楽ならば「死」もまた楽のはずです。日々生きることを「一切皆苦」から「一切皆楽」に転換すれば良いのです。それはお釈迦様の教えに忠実であれば可能なはず。なぜならば仏教の教えでは「生と死」は不可分（生死不二）であるからです。ですから日々の行いが安らぎの処へたどり着くための実践であるならば、私は「生」と伴に「死」もまた語らなければならないのです。「良く毎日を生きること」は「良く毎日を死に向かって生きていること」つまり「良き死」は「良き生」の必然の果であり、「良き生」は「良き死」の必然の因だからです。

仏教では「生死不二」と同様に「色心不二」つまり「肉体（色）と心は不可分のもの」という根本的な考えがあります。現代社会では「生」から「死」への介添え役は医者が担っています。これは肉体死のコントロール（いかに物理的な死を遅らせるか）が主目的となっていますが、「良き生を全うし良き死を迎える」という考えはないように思えます。私は本来、「色」の専門家である医者と「心」の専門家である僧侶は「不二」の関係になければならないと考えています。人が「生」から「死」へ歩むとき「色心」両面の介添え役があって初めて「良き生死を全う」できると考えます。しかし日本では宗教家はその介添え役になることはほとんど皆無です。少なくとも僧侶の役目は肉体的な死の後始末にしか過ぎません。残念です。

私は「生死不二」を行うことでこの残念な僧侶の役割の現実を打開していきたいと考えています。次回より日々の生活の中で観て聞いて行い考えた「生死」のありのままについてお話ししていきます。今回はその序文のようなものなので少し理屈っぽく抽象的な話となってしまいました。これまでに私は幾たびも「あなたはなぜ出家したのですか？」と質問されてきましたが、その度に「前世からの因縁で私が出家することは決まっていたことなのです」と言っては皆さんを煙に巻いてきました。しかし今、出家して7年お釈迦様と伴に行いの道を歩み始めて2年、ここに至ってやっと私のその信仰の柱はもう倒れることがないだろうという確信を得ることができたので、ここに私の信仰の出発点をしっかり言葉にして行かなければと考えています。

“私は最後の死ぬ瞬間まで「ああ、楽しい人生だったな」とそう思い続けて死んでいきたいと望み、その望みを実現するための「良き生を全うすることは良き死を全うすること」という「信」を得ることができました。後はひたすら「日々これ楽し」と思い続けて死に至ることができるよう歩み続けていくだけです。”言葉にするとなんとたわいないありふれた日々でしょう。ありふれた日々をあたり前に過ごすことが、私の願いに向かって進む道だと信じて、今日も「ありふれた楽しい毎日」をこの琉游 琉游舎：戸井 出琉・恭子 舎から皆さんに送り届けていきたいと思ひます。（出琉）

お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152

矢板市大槻2319-17 コリーナ矢板C-850